Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-27

夢見る頃を過ぎても ： 田辺聖子『新源氏物語』論

北村, 結花

(Citation)
国際文化学研究 ： 神戸大学国際文化学部紀要, 14:1-19

(Issue Date)
2000-11

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001223

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001223

KOBE UNIVERSITY

夢見る頃を過ぎても——田辺聖子『新源氏物語』論

北村　結花

一九七八（昭和五三）年の田辺聖子の『新源氏物語』の登場は、『源氏物語』翻訳史のビッグバンであった①。田辺訳は、「埋める作業」、即ち原文の「言葉惜しみとはいわぬまでも表現不足、言葉惜しみ」の箇所を「わずかの暗示をパンだねに、会話や状景を発酵させ、ふくらませる」ことにより②、現代からの読みに基づく新たな『源氏物語』を創造した。

その結果、原文の絶対性は失われ、一九八〇年代以降、田辺訳以上の原文離れが加速度的に進み、さまざまなスタイルの『源氏物語』が陸続と登場してくる。主だったものとしては、大和和紀の『あさきゆめみし』、瀬戸内寂聴の『女人源氏物語』、橋本治の『窯変源氏物語』などが挙げられよう③。

これら一九八〇年代以後の翻訳作品の最大の功績は、『源氏物語』を古典アレルギーの強い現代の読者にも身近な存在としたことである。田辺訳はそのさきがけとして後の翻訳の誕生を促し、表現や内容に影響を与えている。たとえば、『あさきゆめみし』の場合、特にその最初の部分において、人物の呼称や物語展開などに、田辺訳そのままといった個所も少なくなく、田辺訳の影響を無視できない④。また、活字による翻訳作品のなかでは発行部数も多く、宝塚歌劇などでの舞台上演も行われるなど、現代における『源氏物語』享受に幅広く寄与しているといえよう⑤。

本稿では、田辺訳の表現、内容上の特質を考察し、その上で田辺訳に描かれた『源氏物語』世界の個性を浮舟をめぐる物語をもとに探ってみたい。

田辺訳は、『新源氏物語』と続編の『新源氏物語　霧ふかき宇治の恋』からなるが、『源氏物語』を「近代小説に慣れた私たちにとって違和感なく紹介[6]」することに正編・続編ともに一貫して努めている。

現代の読者がまず違和感を覚えるのは、古典独特の文章表現であろう。古語と現代語という差異のみならず、①地の文と会話、心内語との判別のむずかしい文章、②複雑な敬語体系とそれに伴う主語や目的語の非明示、③頻出する和歌、④草子地の存在などは、原文を読む際の難関となる。田辺訳は、現代の読者に馴染みの薄いこうした表現を大幅に改変する。例を挙げよう。

例①

（原文）

上、いとほしく、うたて思ふらんとて、知らず顔にて、「大宮なやみたまふとて参りたまひぬれば、今宵は出でたまはじ。汨のなごりにや、心地もなやましくて起きゐはべるを、渡りたまへ。つれづれにも思さるらん」と聞こえたまへり。

（東屋）

（田辺訳）

中の君は異母妹が可哀そうでたまらなかった。

（まあ、どんなにか……身の置きどころのない気持で狼狽したことだろう、世慣れぬ、まだ少女のようなあの娘が……）

と思うといとおしく、そのことは聞かなかったふりをして、浮舟に言い遣った。

「后の宮がお具合が悪いということで、宮さまは参内なさいましたから、今夜はもうお帰りにはなりますまい。わたくしは髪洗いのせいか、気分がすぐれずに、まだ起きていますのよ。あなたもいらっしゃらない？　退屈していらっしゃるんじゃなくて？」

例②

（原文）

里の名のむかしながらに見し人のおもがわりせるねやの月かげ
わざと返り事はなくてのたまふ、侍従なむ伝へけるとぞ。（東屋）

（田辺訳）

〈里の名のむかしながらに見し人のおもがわりせる閨の月かげ〉
（宇治という里の名も、世を憂しと思う私の気持も変らぬのに、閨にさし入る月の光でみれば、愛する人は違っているのですよ）
薫はそれをことさらに返事に書かず、侍従に伝えさせたのであった。

例③

（原文）

例の、独りごちたまふとかや。（蜻蛉）

（田辺訳）

薫は永遠に充たされぬ思いに苦しむのであった。

例①のように、田辺訳は会話に鉤括弧、心内語に丸括弧を付して、地の文との差異化を図る。また多くの場合、会話や心内語の個所では改行が施されており、それぞれの判別はたやすい。敬語は、会話文中のものは概ね訳出されているが、地の文における敬語については、例①の「上、……聞こえたまへり」↓「中の君は……浮舟に言い遣った」、例②の「わざと返り事はなくてのたまふ」↓「薫はそれをことさらに返事に書かず」のように、主語や目的語を補った上で省略されることが多い。ただし、皇族への敬語は簡略になっているが、継承されている（宇治十帖であれば、匂宮には敬語が付き、薫には付かない）。和歌は、削除あるいは、会話などに織り込まれ、散文化されるものが多い。そのまま引用される場合には、例②のように和歌に山型括弧を付し、現代語訳が添えられている。

さらに田辺訳は、『源氏物語』の根幹をなす「語り」に手を加える。自在な視点移動とともに作中世界内外を融通無碍に行き来する『源氏物語』の語り手は、近代小説のいわゆる「客観描写」に親しんだ現代読者には馴染みが薄い。田辺訳は語り手を存続させながらも、原文における強烈な存在感を薄め、違和感を減らす。まず、語り手の指標である草子地を大幅に削除改変する。例②では、「侍従なむ伝へけるとぞ」という草子地が、「伝えさせたのであった」と客観描写風に訳され、例③の草子地は、まったく意味の異なる文に置換されている。先に見た地の文における敬語の削除もまた、語り手の存在感を希釈する働きをなしている。

現代の読者が違和感を覚えるのは文章表現ばかりではない。有職故実など古典知識も現代の読者が苦手とするところである。田辺訳は丁寧に解説を補足する。「細長（女の着物）」といった短い割注形式のものから、半ページ以上に及ぶものまで分量はさまざまだが、すべて本文中に組み込まれている。古典知識の解説補足は田辺訳以前の翻訳にも少なくない。しかし、谷崎訳のように頭注などで解説がなされた場合、いちいち参照するのは面倒であり、また、そのたびに読みが中

断され、『源氏物語』を味わう楽しみが半減しかねない。とはいえ、注を飛ばして読めば、物語内容を十分に理解することはむずかしい。そこで田辺訳も含め、一九八〇年代以降の翻訳では、古典知識の解説を本文中に加筆することが一般的となってきている。読者が注を参照する手間をかけることなく、読みに専念できるようにするための読者サービスである。

また、『源氏物語』では、巻の変わり目で話が飛んだり、新たな人物がいきなり登場したりすることがあり、とまどう読者も少なくない。田辺訳はそうした飛躍を加筆や物語の順番を入れ替えることで埋めていく。たとえば「手習」巻は、「そのころ横川に、なにがしの僧都とかいひて、いと尊き人住みけり。」と、横川の僧都なる人物が突然、登場する。読み進めると、「浮舟」巻の最後で宇治川に入水し、その後行方知れずになっていた浮舟を僧都とその妹尼が助けるに至った経緯が語られ、それまでの物語とのつながりが見えてくる。蘇生した浮舟が姿をあらわすのは、さらにその後である。これに対し、田辺訳は巻の冒頭でまず、浮舟が宇治川に身を投げた時の様子から語り始める。読者の興を先に満たしてから、横川の僧都らが浮舟を助けたという背景説明を語るという、映画のフラッシュバックの手法に似た出だしで読者を惹きつけ、飽きさせない工夫である。

さらに、物語内容についても、「近代人の感性では、ここがもう少し読みたい、というところを、原典はさらりと流すが、それでは近代小説として読んだときに、どうも食い足りない、欲求不満になってしまう⑦」ことが少なくない。そこで田辺訳は冒頭で触れた「埋める作業」によって、物語を具体的に描写し、読者の理解を助けていこうとする。

例①をもう一度見てみたい。例①は少将との縁談がこわれ、継父である常陸守の屋敷に居づらくなった浮舟が、異母姉である中の君のいる二条の屋敷に身を寄せていたとき、中の君の夫である匂宮にいきなり言い寄られた直後の一節である。中の君の心中思惟（「いとほしく、うたて思ふらんとて」）に、「まあ、どんなにか……身の置きどころのない気持で狼狽したことだろう、世慣れぬ、まだ少女のようなあの娘が……」と加筆がなされ、匂宮に突然言い寄られた浮舟を気遣

う中の君の気持ちが、具体的に読者に伝わってくる。

『源氏物語』を現代に移植するにあたってさまざまな趣向を凝らした田辺訳はまた、全体に難解な語彙が少ない。ルビも古典用語に限らず、幅広い語彙に丁寧に振られており、平易でわかりやすい。「ほんっとに普通の小説みたい」な感じで面白く読める[8]という田辺訳は、何よりもまず読みやすいのである。

文章の読みやすさということは、翻訳の個性としてわざわざ言挙げすることではないかもしれない。が、たとえば改行がきわめて少なく、また主語などの補足がほとんどなされない谷崎訳や、原文以上の濃密な敬語と晦渋な表現の頻出する橋本訳は必ずしも読みやすいとはいいがたい。谷崎訳は『源氏物語』の「語り」を現代日本語に移植することが第一義の目的であり[9]、橋本訳は「『源氏物語』を翻案して現代小説にする」ために、正編では現代日本語の書き言葉性を、宇治十帖では徹底した丁寧表現を追求した[10]。両訳にとって読みやすさは翻訳の最優先事項ではない。これに対し、田辺訳は「古典を現代に橋渡し[11]」することを目ざし、わかりやすさを優先したのである。

一九八〇年代以降の翻訳としては比較的原文離れの少ない田辺訳は、同時代の翻訳作品のなかでもむしろ、いわゆる逐語訳である円地文子訳や瀬戸内寂聴完訳に近しいものがある[12]。いずれも古典離れが決定的となった時代の翻訳として、『源氏物語』と読者との橋渡しを務めようとする意識が強い。表現に工夫を凝らし、現代の読者が理解しやすい文章で訳出することによって原文の世界を現代に移植しようと努める読者サービス旺盛な翻訳といえよう。

（二）

自由奔放な翻訳のさきがけである田辺訳だが、後発の大和訳や瀬戸内訳のような徹底した削除も橋本訳ほどの執拗な加筆もない。一九八〇年代以降の翻訳としては穏健派の田辺訳だが、そこに描かれた『源氏物語』世界はなかなかに魅力的である。浮舟をめぐる物語を中心にその個性を見てみたい。

田辺訳の語り口は、ソフトで優しい。地の文は常体の文末辞だが、（特に女性の）会話や心内語において柔和な響きを持つ語彙（和語やいわゆる女性語）や丁寧語が多用されている。柔らかく、たおやかな文章は、現代の読者にとっては、『源氏物語』の古典のイメージと結びつき、いにしえの雅やかでうつくしい平安の物語世界という雰囲気を醸し出すのにも一役買っていると思われる。

ソフトな語り口はまた、登場人物の優しさを喚起する。例①においても中の君の姉としての優しい心配りがその穏やかな物言いとともに表現されていた。田辺訳では登場人物の多くが善意の人として描き出される。浮舟をめぐる物語の場合、中の君や妹尼といった浮舟を取り巻く人々にその傾向が強い。原文においてもこれらの人物は基本的には善意の人として描かれている。が、田辺訳はその善良さをさらに強調する。例を挙げる。

例④

（原文）

尼君、急ぐことをうち棄てて、「いかが思さるる」など思ひ乱れたまふ。紅に桜の織物の袿重ねて、「御前には、かかるをこそ奉らすべけれ。あさましき墨染なりや」と言ふ人あり。

尼衣かはれる身にやありし世のかたみに袖をかけてしのばん

と書きて、いとほしく、亡くもなりなん後に、ものの隠れなき世なりければ、聞きあはせなどして、疎ましきまで隠しけるとや思はん、などさまざまに思ひつつ、（手習）

（田辺訳）

「どうなさったの。どんなご気分なの」

妹尼は、急ぎの仕立ても抛って浮舟を案じる。

尼たちの膝もとを埋める衣装は、紅の衣、桜の織物の袿……花やかな彩りである。「こんなお召物こそ、姫君にお着せしたかったのに、墨染の衣なんて……」と愚痴をこぼす尼もある。

「ああ、昔のことを思い出されたのではありませんか。この衣装で……」

と妹尼は限りなくやさしい。

浮舟は尼君に申しわけなく、気の毒でたまらなかった。自分の過去を何一つ打ち明けていないことが……。もし死んだあと、事情を聞き知ることでもあれば、ずいぶん隠し通したものよとうとましくお思いになるだろう……。それでも、やはり今は、いえることではなかった。

（瀬戸内訳）

「どういうふうに御気分が悪いのですか」

と、仕立物はそっちのけに尼君が顔を覗きこみます。この人は亡くなった自分の娘の身代わりのようにわたくしを可愛がってくれるのはありがたいのですが、私が何も過去を打ち明けないのを水臭いと思い、ことごとに秘密主義だと嫌味を言うのがうるさくてなりません。

田辺訳は原文の浮舟の和歌を、「「ああ、昔のことを思い出されたのではありませんか。この衣装で……」と妹尼は限りなくやさしい」と妹尼の言動に変えて訳出し、妹尼の浮舟への心遣いを強調する。

「嫌味を言うのがうるさくてなりません」と浮舟に疎まれる瀬戸内訳の妹尼とは異なり、田辺訳の妹尼は「限りなくやさし」く、浮舟は妹尼への申しわけなさで心を痛ませる。瀬戸内訳や橋本訳が、原文では語られない悪意を殊更に描き、人間の負の面を強調する傾向があるのとは対照的に、田辺訳は人の善意を追求する。ここには「人間のやさしさを、それも、自然に醸し出されるやさしさをかぎりなく愛する⑬」という、田辺の創作作品に一貫して流れる特質を見ることができる。

では、このように善意の人物に囲まれた浮舟自身はどのような人物として造型されているのか。例①の心中思惟の加筆部分で中の君が浮舟を「少女」ととらえていたことを思い起こしたい。原文では浮舟は「二十ばかり」、現代でも——平安時代にはなお——少女というにはやや無理のある年齢だが、田辺訳は浮舟の少女のような世慣れぬさまを強調する。

例⑤

（原文）

恐ろしかりしも思ひ出でらる。（東屋）

（田辺訳）

しかし世間知らずの浮舟には、そのときの動転ぶり、怖ろしかったことも忘れ難いのであった。

例⑥

（原文）

さすがにうち泣きてひれ伏したまへれば、いと世づかぬ御ありさまかなと見わづらひぬ。「いかが聞こえん」など責められて、（夢浮橋）

（田辺訳）

「泣いていらっしゃるだけでは困りますよ。世間知らずのねんねさんみたいに。……ご返事はどうなさるの」

妹尼に責められて　（傍点原文）

例⑤は、例①のくだりからしばらくののち、匂宮に言い寄られたことを浮舟が思い出す場面である。田辺訳はここに「世間知らずの」と加筆し、男女の駆け引きに慣れていない浮舟の幼さを繰り返し語る。例⑥は、出家した浮舟のもとに薫の使者として弟の小君が訪ねてくる場面である。例⑥の原文に「世づかぬ」とあるように、原文においても浮舟は、東国の受領の継娘とはいえ――むしろだからこそ都の男女関係の機微に疎い――世間知らずの箱入り娘として語られている。田辺源氏は浮舟のこうした「世づかぬ」側面を原文以上に前面に押し出す。例⑥では、「世間知らずのねんねさん」という表現もさることながら、「困りますよ」、「どうなさるの」といった子供をあやし、なだめすかすような妹尼の口調が、浮舟を成人した女性というより、未成熟の少女として読者に印象づける。

さらに、田辺訳における浮舟の呼称は、地の文の場合、「宿木」及び、「東屋」の冒頭から約三分の一までは「姫君」、その後はほぼ「浮舟」である。また、会話文などにおいて他の登場人物が浮舟を指していう場合には、「姫君」という呼称を用いることが多い。原文においても「姫君」という呼称は用いられているが[14]、前節で見たように、田辺訳は主語や目的語を補足することが頻繁である。「姫君」という言葉は原文以上に頻繁に繰り返され、「少女のような」浮舟というイメージはさらに強調されることになる。

「世間知らず」の「姫君」という訳語は、現代の言語感覚からすれば、古語にいう「世」、即ち、男女関係に疎いお姫

様というばかりでなく、親の庇護のもとに育ったため、世の中のことも知らない、当然男女のことも知らない女性、というイメージを浮かび上がらせるだろう。ここで注意すべきは、浮舟のことをそのように世間を知らない女性、と語る田辺訳の語り手や妹尼は、浮舟の知らない「世間」（男女関係だけではなく、人間の邪悪さや狭量さ、あるいは日常生活の煩雑さや、政治や経済との関係まで含めた世間）を知っていることになる、という点である。そのような語り手や妹尼の存在は、浮舟をめぐる善意に満ちたうつくしい物語の世界が、現実と回路を持たない絵空事ではなく、現実を十分に知った上で、あえて夢を語る世界であることを読者に感じさせ、それがゆえに読者は安心して純化された物語世界に遊ぶことができる。そのような頼りになる語り手は、男女関係を次の例のように語っていく。

例⑦

（原文）

女君は、あらぬ人なりけりと思ふに、あさましういみじけれど、声をだにせさせたまはず、いとつつましかりし所にてだに、わりなかりし御心なれば、ひたぶるにあさまし。（浮舟）

（田辺訳）

浮舟は動転していた。

傍へするりと身を寄せて添い臥した男を、薫だとばかり思っていたのに、

「静かに。声を立てないで。驚かないで」

と囁く声は薫ではない。衣ごと抱きしめる男の腕も、耳朶にひめやかにかかる熱い息も、薫のそれではなかった。たきものの香りも、右近にすれば薫そっくり、と思うだろうけれど、芯熱のある体臭とまざりあって独特の香りがゆらぎたつ、

それは微妙に薫と違った。

（あ、――）

浮舟は叫びをあげようとしたが、唇を塞がれてしまった。うむをいわせない激しい接吻に、浮舟は呆然としたままである。やっと唇が離れて、

「あなたは？……」

といいかけると、

「しっ。黙って。私はあなたを愛している男。それだけでいいじゃないか、黙って。女房たちには何も悟らせないで」

浮舟は混乱から立ち直れないで夢を見ている心地だった。

宇治で薫の訪れを待つ浮舟のもとに匂宮がしのびこみ、一夜を明かす場面である。この後、浮舟は薫と匂宮との板挟みに苦悩する日々を送ることになるのだが、ここに田辺訳は「埋める作業」を施す。饒舌とも思われる加筆は、読者の好みの分かれるところであろう。しかし、原文では地の文で「ひたぶるにあさまし」としか語られていない匂宮の行動や浮舟の反応を、会話文を織り交ぜ、より具体的に描写することにより、浮舟の運命を大きく狂わせてしまった一夜を鮮やかに浮かび上がらせる。

映画のワンシーンを思わせるこうした加筆は、殊に男女の恋愛シーンに多く施されている。原文には具体的な性描写はなく、男女の心情もさほど詳細には語られない。それはそれで風情があるとはいえ、やはり些か物足りなさを覚える現代の読者は、田辺訳のこうした加筆によって物語を読む醍醐味を味わえるわけだが、具体的な加筆は、それを書くことで他のもろもろの性愛の猥雑さを切り捨てるということでもある。田辺訳の描くセックスシーンは官能的ではあるが、卑猥で

はない。大和訳があくまでうつくしい絵によってセックスシーンを描いたのと同様、田辺訳も華やかに情熱的な言葉遣いで性の場面を語る。浮舟の恋愛は悲劇である。しかしながら、うつくしく描き出すことによって、ロマンティック・ラブにあこがれる読者の夢を叶える物語を紡ぎ出しているのである。

ところで、田辺訳には「～いますのよ」、「～じゃなくて？」（例①）といった文末辞が散見される。「テヨダワ」言葉として知られるこうした語彙は、戦前の女学生言葉とされるが、日常の話し言葉としてよりむしろ、少女雑誌への投稿文などにみられるように女学生同士の書き言葉として機能していたものであり、大正から昭和初期に流行した、吉屋信子に代表される少女小説に特徴的な言葉遣いでもあった[15]。宇治十帖編は、女性同士の会話や心内語が多いせいか、正編以上にその使用頻度が高い。

例⑧　（原文省略、括弧内は発言者）

「下々（しもじも）の耳に、ちらとでも入ったらうるさいことになってよ」（浮舟付きの右近）

「その甲斐（かい）がないかもしれなくてよ」（中の君付きの右近）

「どうしてわたくしが宮さまをお引とめできまして？」（浮舟）

田辺自身の少女時代へのノスタルジアとも取れる語彙選択だが、こうした言葉遣いは、田辺訳に往年の少女文化を髣髴とさせる。大和訳が現代の少女文化と密接に結びついているとすれば、田辺訳には実際の年齢（あるいは性別）とは無関係の「少女」文化との結びつきを指摘できよう。「薫と匂宮の両方に愛される浮舟、これはすべての少女の夢でしょう」と田辺は語っている[16]。田辺訳は必ずしも少女を主たる読者対象としてはいないため、大和訳のように現実の少女の身丈

に合わせての改変――恋愛物語への特化、匂宮や薫の人格の純化など――がなされているわけではない[17]。田辺訳は、大和訳が削除した匂宮や薫の浮舟への侮りや薫の俗物性など、人間の醜さや愚かさも丹念に描いている。けれどもそのような醜さや愚かさは、あくまでもうつくしい言葉で語られるがゆえに、生臭くなることはなく、夢を見ようとする読者の、その夢の尊さを妨げるようには描かれない。そしてまた、作者も読者も、必ずしも少女期の渦中にある少女ではない。少女を客観的に見る視点も当然持っている。そういった百戦錬磨の少女たちは、しかし百戦錬磨であるからこそ、少女の夢を求めるのではなかろうか。

田辺と宝塚歌劇とのつながりの深さはつとに有名だが、田辺は、「「源氏物語」というのは、ほとんどの女性にとっては、「すみれの花咲くころ」なのである。あの宝塚歌劇のテーマソングが千年にわたって鳴りひびいているのだ」と述べ、いずれも愛や恋の専売局であり、担い手が女性であると、その共通項を挙げている[18]。また、「すべて、女であれば、たいていどこかに持っている「少女」の要素を触発される」のが宝塚であるという[19]。ことの当否はともかく、宝塚が、年齢を問わず多くの女性（そして少数ながら男性）を魅了しているのは事実である。その宝塚で、田辺訳がこれまで二度、上演されているのは、根拠のあることであろう。

（三）

人の隠しすゑたるにやあらんと、わが御心の、思ひ寄らぬ隈なく落としときたまへりしならひにとぞ、本にはべめる

（夢浮橋）

『源氏物語』は、出家した浮舟のもとに薫が小君を使いに出したものの、何の返事も得られなかったことに対して、「男が浮舟をかくまっているのではないか」という薫の疑念を語って唐突に幕を閉じる。終わり方の不可思議さには諸説あるが、いずれにしろ、現代の読み手にはあまりにも唐突の感が否めない。一九八〇年代以降の翻訳はこのラストシーンを物語の幕切れにふさわしく造り替える。田辺訳も、「(その昔、おれが宇治の浮舟を隠し据えておいたように、誰かほかの男がひそかにかくまっているのではあるまいか)という疑いが萌した。」と原文に沿った訳をした後に、ひとつの場面を加筆する。

(田辺訳)

——そのころ浮舟はようやく身を起こして、人気のない端近なところににじり出ていた。山の端(は)に月が出ていたからである。

薫は「法の師とたづぬる道をしるべにて　おもはぬ山に踏みまどふかな」という感懐を洩らした。法のみちから恋の山に踏みまどうたというが、浮舟はあべこべに、恋の山に踏みまどうて、法のみちに入ったのである。

(やっと心がきまったわ。……いいえ、これからもまだまだ、悩みや惑いがあるかもしれないけれど、でもやがてはみんな、なつかしくいとしいものに思えるような日がくるかもしれないわ……)

浮舟が月を仰いで、清らかな微笑(ほほえ)みをわずかに泛(うか)べたことを、京の薫はどうして知ろうか……。

原文において浮舟は、小君との対面の場面で「ものものたまはねば」と、頑なに口を閉ざした姿が語られて終わる。そこからは孤立無援のなかにあって、ただ一人でこれからの人生を歩まねばならない浮舟の凄絶な孤独が想起されるが、田

辺訳に描かれるのは、これまでの苦悩や迷いから一歩抜け出し、新たな人生を前向きに歩んでいこうとする浮舟の姿である。

同様の加筆は瀬戸内訳にも見られる。

（瀬戸内訳）

小君のむなしい報告を受けてあの方はどんなお顔をなさったことやら。案外、了簡（りょうけん）のせまい所もあるお方なので、妙に気を廻して、こうまでかたくなのは、わたくしにかくし男でもできて、こっそりかくされているのではないかぐらいの想像をしていらっしゃらないともかぎりません。

あの方もこの方も、誰もすべてはみな、川の向こうの世界に住むはるかな昔の夢の中の人たちにすぎません。これまで見えていたものが少しずつ見えなくなっていくにつれ、これまで見えなかったものが。ほのかにほのかに見えてくるような気もしてまいります。次第に光を増す夜空の星のように。

ここに描かれているのは大人の女としての浮舟である。薫の狭量さにも自ら気づくだけの余裕がある瀬戸内訳の浮舟は、女の業を味わい尽くした後、ここに至って、匂宮、薫、そしておそらくは母親や妹尼までも「はるかな昔の夢の中の人たち」と思い果て、自らは「川の向こうの世界」即ち、俗世を既に離れたことを強く意識する。この悟りを支えているのは、これまで運命に翻弄されるがままに、その心の内もさまざまに揺れ動いてきた、その心の振幅の激しさである。瀬戸内訳の加筆はその心の揺れを隅々まで描き出している。

これに比較すると、田辺訳の浮舟の悟りは、少女の夢を追う田辺訳にとっての必然的な悟りであったことが見えてくる

だろう。田辺訳の浮舟は、瀬戸内訳とは異なり、薫より優位に立とうとしない。世間知らずの姫君だった浮舟は、自分の知らない悩みや惑いが、将来に拡がっている可能性を否定しない。自分の知らない世界に謙虚になること、謙虚になりつつも、時の流れを味方に付け、世間を知らない自分に静かな自信を持つこと、それこそが、世間知らずの姫君にとっての悟りであった。

その彼女の悟りを、世間を知る語り手は「京の薫はどうして知ろうか」と、穏やかに肯定する。浮舟の物語は、実は田辺訳の語り手にとっても、密かな夢であったのではないだろうか。その夢の果ての悟りは、悟りというものと程遠い日常とともにある現代の読者にとって、自分たちにも手の届く、そして自分たちに寄り添ってくれる救いであるのだろう。

註

① 初出は、一九七四（昭和四九）年から一九七八（昭和五三）年にかけて『週刊朝日』に連載（全一六九回）。ただし、単行本化するにあたり（一九七八～一九七九年）、加筆訂正がなされている。現在、一般に読まれているのは単行本（及び、その文庫版）であり、また広汎に読まれるようになったのは単行本化によるところが大きいと思われ、本稿では単行本の出版された一九七八年を田辺訳の誕生の年と考えたい。なお、続編である『新源氏物語　霧深き宇治の恋』は一九九〇年の発行。

② 田辺聖子　『源氏紙風船』　新潮文庫　一九八五年　二〇七ページ。

③ 出版年は大和訳が一九七九～一九九三年、瀬戸内訳が一九八九年、橋本訳が一九九一～一九九三年。また、発行部数は一九九九年十一月現在、大和訳が一七〇〇万部、橋本訳が四二万部。田辺訳は四二〇万部。瀬戸内訳は未詳。またいずれも部数も文庫版のみ。（朝日新聞日曜版　「名画日本史　源氏物語」二〇〇〇年一月九日付による）

④ 具体的には、若紫が光源氏を呼ぶ「おにいさま」という呼称や、葵上の最期の場面での源氏とのやりとりなど。

⑤ 宝塚歌劇は一九八一年と一九八九年の二回、いずれも月組公演。また二〇〇〇年六月には関西歌劇団による公演も行われている。なお、二〇〇〇年春には『あさきゆめみし』の花組公演が行われている。

⑥ 田辺　前掲書　二〇七ページ。

⑦ 田辺　前掲書　二〇五～二〇七ページ。

⑧ 「もりの散歩道」　http://www.geocities.co.jp/CollegeLife/4176/

⑨ 谷崎は「春琴抄後語」において『源氏物語』の文章を「会話と地の文の区別がやゝこしく何処からだれの言葉になるのだか分りにくいのであるが、しかしあゝいふ風にした方が日本文の美しさがでる」（『谷崎潤一郎全集』二一巻　八〇ページ）と述べている。また、戦後の改訳について「実際に口でしやべる調子に近づける」ことを目指したとしている。（『潤一郎新訳　源氏物語』巻一　中央公論社　一九五一年）　一〇ページ。

⑩ 橋本治　「物語の論理・〈性〉の論理――『窯変源氏物語』との交感」（橋本治、三田村雅子、河添房江、松井健児による座談会）（『源氏研究』第一号　翰林書房　一九九六年）　三～七ページ。

⑪ 田辺　前掲書　二〇七ページ。

⑫ 円地訳・瀬戸内訳については、拙稿「いまどきの『源氏物語』―円地文子訳から瀬戸内寂聴訳へ」（『国際文化学』創刊号　神戸大学国際文化学会　一九九九年）を参照。

⑬ 清川妙　「田辺さんの夢の宝石」（田辺聖子著『歳月切符』文庫版解説）　集英社文庫　一九八六年　二五六ページ。

⑭ 原文の地の文における浮舟の呼称は、「宿木」、「東屋」においては姫君であるが、薫と結ばれたのち、「浮舟」では女

君へと変わる。さらに入水後（「手習」以降）は姫君に戻る。ただ、女、御方など、他の呼称も用いられ、また、呼称そのものが省略されることが多いため、「姫君」という呼称の使用頻度はかなり低い。

⑮ 女学生言葉については、本田和子『女学生の系譜』（青土社　一九九〇年）、川村邦光『オトメの祈り』（紀伊国屋書店　一九九三年）などに詳しい。

⑯ 田辺聖子「理想を追い求める恋人たち」（『新源氏物語　霧ふかき宇治の恋』）　新潮文庫　一九九三年　三八四ページ。

⑰ 大和訳については拙稿「「少女の夢」の往還―『あさきゆめみし』論」（『国際文化学』第三号　神戸大学国際文化学会　二〇〇〇年）を参照。

⑱ 田辺　前掲書（『源氏紙風船』）　一九～二二ページ。

⑲ 田辺聖子　『わが愛の宝塚　夢の菓子をたべて』（講談社文庫　一九八七年）　二二ページ。

引用は、『源氏物語』原文は小学館新編全集、田辺訳は『新源氏物語　霧ふかき宇治の恋』（新潮文庫版）、瀬戸内訳は『女人源氏物語』（集英社文庫版）に拠る。ただし引用に際し、表記を改めたところがある。